

【本文】

第十四回 轡を飛して使女深淵を涉
錫を鳴して、大記總を索

かたはらに侍りたる、貞行等は伏姫の自殺を禁めあへなくも、挿頭の花を散せしごとく、遺憾やるかた
なかりけり。そが中に孝徳は、男子にもます姫君の、末期の一句に激されて、身を措ところなかりけん、
亡骸のほりにおちたる、血刀を手はやく取て、ふたゝび腹を切らんとす。そのとき義実声をふり立、「や
をれ大輔狼狽たる状。その身に大罪ありながら、君命を俟ずして、自害せんとは奇怪也。伏姫一旦甦生し
たれば、罪一等を宥るとも、この山に入るものは、頭を刎んと捉しものを、法度を枉ておのがまに〜、
腹切のことを聽んや。觀念せよ」と進みよりて、刃を引提立給へば、願ふところ、と孝徳は、居なほりて
合掌し、項を延す程もなく、上に晃く刃の稲妻。丁と打たる大刀風に、思ひかけなく孝徳が鬚弗と截捨
給へば、是は、と見かへる罪人も、諫かねたる貞行も、驚き思ふ仁君の、恩義にいとと畏る。

義実氷なす、刃をやをら韃に納て、泛る涙をふり拂ひ、「見よや蔵人、わが手つから、罪人を刑罰せり。
法度は君の制する所、君又これを破るといふ、古人の金言宜なるかな。われもし民ともる共に、けふこの
山に登りなほ、大輔に咎なかるべし。頭に代たる鬚は、渠が亡父へ寸志なり。渠が穢き時よりして、名を
大輔と喚做せしは、大國輔佐の臣たれ、とその久後を祝せしに、わが官職もやうやく進みて、治部大輔と
大輔と、その國訓は異なれ共、文字はかはらぬ主従同名、かゝる故にや主のうへに、あるべき崇を身に受
けん、可憎しき壮伎が、よに埋木とならん事、かへす〜も不便也。親八郎は大功あり、大輔も忠なきにあ
らず。その親といひ、その子といひ、勲功あれども賞を獲ず、その死に臨み、その罪に、陥るに及びては、
主尚救ふによしなき事、わが子にまして哀傷の涙はこゝに禁めかたし。やよ大輔よ、孝徳よ。わが此こゝ
ろをよくも知らば、亡親の為、姫が為に、命をたもち、身を愛し、佛につかへ苦行して、高僧知識の名を
揚よ。こゝろ得たりや」と叮嚀に、諭し給へば孝徳は、辱なきにはふり落る、涙に哽び地に伏て、應かね
つゝ声を咽む、理りなれば貞行は、鼻うちかみて進み出、「今にはじめぬ君の仁心、姫うへの御最期には
啣がましき事もなく、家臣のうへをかくまでに、聞えさせ給ふ事、大輔和殿が身にとりては、一郡の守護
万貫の、禄にもまして満足ならん」といはれてやうやく頭を擡、「某寔に不肖なれども、如是畜生だも
菩提に入れり。今より日本廻國して、灵山灵社を巡礼し、伏姫君の後世を弔ひ、わが君御父子の武運を祈
らん。姫うへの落命も、又某が祝髪も、みな八房の大ゆゑなれば、大といふ字を二ツに釐き、大にも及ば
ぬ大輔が、大の一字をそがまゝに、大と法名仕らん」と申上れば義実朝臣、「適いしくも申したり。件の

犬は全身に、黒白八の班毛あれば、八房と名つけしが、今さら思へば八房の、二字は則一戸八方に至るの義なり。加旃伏姫が自殺の今果に瘻口より、一道の白氣たな引、仁義八行の文字顯れたる、百八の珠閃き沖り、文字なき珠は地に墮て、その餘の八は光明をはなち、八方へ散乱して、遂に跡なくなりし事、其所以なくはあるへからず。後々に至りなば、思ひあはする事もやあらん。菩提の首途の餞別には、只この珠数にますものあらじ。努秘感せよ入道」と諭して贈て賜ければ、孝徳は手に受て、再三たびうち戴き、「こは有かたき君の賜もの、今より諸國を編歴して、飛去たる八の珠の落たる所を索ねもとのめ、はじめのごとく繋ぎとめんに、一百八の數に満ずは、又當國へ立かへりて、見参に入り候はし。年を歴るとも音耗なくは、旅より行に野ざらしの、骸は餓たる犬の腹を、肥しにけりと思召れよ。是ぞ寔に今生のおん別に候べし」と思ひ切てぞ申ける。

この時既に日は暮て、夜ははや初更のころなるに、昼よりも猶明かりける、月は半輪の雲もなく、山には萬樹の影あり。寥寥たる水の音、颯々たる松の声、腸を断媒なるに、鹿は峯上に鳴て、白露の霜となるを悲しみ、猴は幽谷に叫て、孤客の夜衾を寒しむ。卒に來て訪ふも寂しき深山路に、心つよくも只ひとり、かくまで行ひすましけん、伏姫の事をのみ、主従頻りに感嘆せり。

當下堀内貞行は、孝徳等と議していふやう、「姫つゝの自殺によりて、時を移させ給ひしかは、日は暮山は嶮しきに、御下向は心もとなじ。さればとて夜とゞも、こゝに明させ給ひなは、おん亡骸をいかにせん。毒蛇猛獸の患なしといふべからず。進退究めて難義也。和殿はなにとか思ひ給ふ」と問れて霎時沈吟じ、「いほるゝ所理り也。こゝにて曉させ給はむことは、遠慮なきに似たり。所詮和殿と某と、姫の亡骸を昇奉り、わが君は御手づから、蕉火を把せ給ひて、下山をいそがせ給はん哉。麓にはおん俱の人々を、留め給ひぬ、とうけ給はれば、おん迎に参るべし。縦そのもの共耳怖して、この溪澗を涉さず共前面の岸よりあなたにて、遭奉らざることはあらじ。この議はいかに」とうち相譚ふ。義美これを聞あへず、「伏姫すら口ひとり、去歳よりこゝに在りけるものを、弓箭たる身の主従三人、毒蛇猛獸をおそるゝ為に、一夜亡骸を成ることかなはず、遽に麓にくだらんや。此を思ひ彼を思ふに、男児にして見まほしき伏姫が心操、親はづかじきものぞかし。五十子に泣立られて、心よはくもはるゝと、みづから姫を訪し事、今さら慚愧に堪ざる也。この故に今その死に及びて、われ一滴の涙を見せず。魂魄いまだこゝを去らずは、汝達が議論女々しとて、伏姫に笑れなん。杖ををりて火に焼つけよ。われも割筆をひらくべし。いそぐことかは」と宣へば、貞行孝徳感激して、且伏姫の亡骸を、洞の中へ入れまゐらせ、主従石門の樹下

に團坐して、しづかに天の明るをまちけり。

浩処に、前面の岸に、影の蕉火閃きて、人語幽に聞えけり。貞行遙にこれを見て、「さればこそ人々がおん迎に参りたれ。いでやこの瀬を涉せん」といひも詠らず衝と立て、聽て水際に走り出、「其処に見ゆる蕉火は、おん迎の人々なるべし。殿はこなたに在らず。吾們既にこの川を涉せり。風聞とはうらうへにて、流れは緩く瀬は浅し。とくく涉し候へ」と声を限りに呼びかけたり。折ふし追風なりければ、その声定かに聞えけん。蕉火をあちこちと、閃しつゝ坂をくだり、岸にをり立とおぼしくて、先にすゝむもの、後に続くもの、馬を牽入れ、声をあはして、人影涉し來つ。こなたの岸によるを見れば、思ひかけなき女轎を、釣臺とかいふ物に括著、健なる男七八人、赤裸にてこれを昇たり。その餘は籠に遺されし從者、又、瀧田より参れるもありけり。貞行はやく見咎めて、「あれはいかに」と問ふ程に、轎子を昇おろし、衆皆水際についていふやう、「日の没なんとせし比まで、屋方の帰らせ給はねば、吾們既にまうし合せ、途まで迎奉らんとて立出候折、奥さまより火急のおん使來れり。よりてもる共に、歩をいそがし候へども、いく程もなく日を消し、あなたの岸まで参りしに、喚かけられて吾們のみ、涉すべうもあらざれば、兩具続松などを、乗て來つる釣臺に、彼おん使の轎子を括著、辛くも涉して候」といふに貞行うち點頭、「それは微妙もはかりにけり。おん使とくくこれへ」といそがせば、五六人立かかりて、手はやく細引の麻索を解去つゝ、轎子の戸を引開けり。と見ればおん使は専女にて、年紀は四十あまり、名は柏田とぞいふなる。いぬる比、伏姫の安否をしるべきために、密使をつけ給はりて、前面の岸まで來つるもの也。

この日火急のおん使なれば、道竟轎夫を、飛させてや参りけん、轎のうちには、三尺あまりなる白布を結びさげ、其身は袂の下、帯の上より、鳩尾のほとりまで、白き練を、いくへともなく巻締て、おなじ練の鉢巻をしたり。俗に早打といふものめきて、いと精悍しく見ゆるものから、長途を揺れつゝ來にければ、目眩きて左右なくは立並びけるを、衆皆扶いたす程に、貞行は、且義実のほとりに参りて、如此々と聞えめぐるに、柏田も後に跟て見参す。義実は、「この使、いと心もとなくて、その由を問給へば、おん病著、いよゝますゝ重らせ給ひつ。殿はかへらせ給はずや」と問なく時なく問せ給ひ、或は假染のおん謔言にも、姫うへ其処にゐますが如く、物いひかけてうち泣給ふ。おし量り奉れば、痛しき事限り侍らず。媼等はさらせ也。御書司、義成をも、兎に角慰かねさせ給ひて、父うへは姉君を、みづから訪せ給

はたとて、実は富山に赴き給ひぬ。けふ一、日待せ給へ。翌はかならず姉を將て、かへり來まさん。としらへ給へば、うち驚き給ひつゝ、富山は名たゞる魔所と聞。殿もし彼処へ赴き給はゞ、異なくてやは還り給ふ。とく喚かへし奉ね。とむつかり給ひに、御曹司も、いよんせんすべまします。柏田は彼山の案内を、知たるものと聞たるぞ。屋方出させ給ひてより、まだ一時は過へからず。いそがば途にて追著なん。参りて此よしをよく申せ。と直はするに物とりあへず、遽て御館を出しより、人疲労るれば里々にて、肩を繼せ、歩を急がせ、辛して参り侍り」とまうす折から外面なる、從者等騒ぎたち、「前面の岸に隱々と、火の光見えたるが、今はや水際にをり立たり。あれは正しく轎子ならん。それがあらぬか」とばかりに、罵散動声囂々たり。直行孝徳聞あへず、走り出つゝうち眺め、「再度の急訟、心もとなし。こなたより扶掖て、とく涉させよ」と下知すれば、つけ給はると應つゝ、彼釣臺を扛あげて、究竟の奴隸十人あまり、流水を切り、石を踏除、あなたの岸に赴きて、はじめのことく釣臺に、轎子を括著、その從者等もる共に、馳でこなたへ涉し來つ。且轎子を昇おろし、とかくして戸を開けば、裡より出る一個の女房その年はまだ井に足らず、その名を校織と呼るゝものせ。嬋娟たる額髪に、練の鉢巻したる、精悍しき打扮は、柏田にまして見ばへせじ。

かくて校織は轎子を出るとやがて氣絶て、忽地に倒れしかば、自行孝徳驚きて、顔に石澆を沃ぎかけ、藥を飲せ、なまゝに、勸程にわれにかへりて、自行等に挨拶す。固よりかゝるおん使に、擇れたるものなれば、長途の疲労を物とませず、自行孝徳に誘引れて、おん前に参りしかば、義美はやく声をかけて、「一度なほ再度の使はらゝよ、心もとなきこと也。五十子はいかにぞや」と問せ給へば、罪々と落る涙を拭ひあへず、「奥さまは今朝日のころに」と未は得いはず伏沈めば、前に参りし

【挿絵】「使女の急訟夜水を洒す」「堀内直行」

柏田さへ、共にまゝとぞ泣にける。義美頻に嗟嘆して、「綽絶たるか」と問ひ給へば、校織ははつかに頭を擡ぐ、「御臨終の事なごは、まじすもなかく、疎に侍り。柏田がおん使に立し後、いく程もあらずなくなり給ひぬ。御曹司の御下は、騎馬をもてこのよしを、告奉るは易けれども、微行の御登山なれば憚あり。汝は曩に柏田と共に、密使をつけ給はりて、富山へ赴きたりと聞は、まゐりて屋方に告奉れ。今宵をな過しそ、といそがし給へば、そがまゝに、早れて参り侍りき」と申上れば、孝徳は、自行と面をあはしく頭を低て嘆息せり。義美巨細に聞給ひて、「五十子が今般の情願、得果さねばわれも亦、遺憾思へども、末期にあはぬは幸ひならん。よしや翌まで存命たりとも、歸りて何といふべきぞ。汝等も且彼を見よ」と洞の方

を見かへりて、亡骸を示し給へば、柏田梭織は胸うち騒ぎて、おん後方に立まはり、さし入るゝ月を燭に、河の中をつくゝ、と見つゝ齊一聲を立、こは姫つゝへにましましけり。猛獸に傷られ給ふ歎、さらずは刃に果給ひけん。こは何とせん浅ましや、痛しざよ」と亡骸のまくらへ後方に転輾び、嘔かへりつゝ泣にけり。義美これには目を遣り給はず、貞行等に言ふやう、義成がさぞ待わぶべきに、人夥参りにければ、暁かけて山を下らん。大輔は十餘人の奴隷も共留りて、翌は伏姫が亡骸を、此処に埋葬せよ。又八房をも瘞得させよ。招かで姫が間人を得たれば、柏田梭織もこのまゝに、今宵一夜は遺し置なん。母の使をなき魂に、手向に、通夜させよ。葬の事は筒様々々」と叮嚀に指しめし、をんなばらを勞ひて、そのころを得させつゝ、従者等をも賞させて、牽もて来りし馬につち乗、あなたの岸へ赴き給へば、遣れるものは孝徳と、共に水際に蹲踞しつゝ、従ふ者は貞行も共、蕉火をふり照し、潮踏をしつゝ涉しけり。

かくてその次の日、午過て富山の麓なる村長は、法師莊家們も共に、棺を扛て喘々、富山の洞を指て來つ。是はこの暁に、義美瀧田へ帰館の折、途より貞行奉て、麓の村長と法師們に、云云の仰を傳て、俄頃に棺葬具を造らせ、金碗大輔に遞与」とて、この山深く遣しけり。又この日より樵夫炭焼、すべて山拵するものに、富山を上下することを許し給ふ。されば孝徳入道は、件の棺を受とりて、且伏姫の亡骸を斂め奉り、則洞を截ひらきて、おん墓所とす。しかれども碑碣なし。只松柏双立て、自然と墓標となれり。人これを傳へ聞、これを喚て義烈節婦の墓といふ。又八房をも土葬にせり。これをば只龍に斂て、敢亦棺を用ひず。こは伏姫の墓を去ること、三文ばかり成の方、老たる檜樹の下に瘞む。人亦喚て犬塚といひけり。葬の事かくの如く、よろづ質素にせられしは、義美豫て孝徳に、仰つけらるゝ所也。姫の志操を汲てなるべし。事果て柏田梭織は、彼十餘人の奴隷を將て、泣つゝ瀧田へたち歸れば、麓の法師村長等も、をのが里々へ歸りにけり。そが中に金碗大輔孝徳は、圓頂黒衣に容をかえて、大坊と法号し、且く山に留りて、伏姫の遺し給ふ、法華經を誦誦すること、一チ日一チ夜も間断なく、四十餘日に及びけり。

さる程に瀧田には、五十子の方の葬式をとり行れ、なき人々のおん為に、米糶施行して、まじしき民を賑し給ひ、又洲崎なる行者の石屋へ、堀内貞行を遣して、物おほく寄進して、参詣のものゝ為に、道橋を造らし給ふ。人みなこよなき功德といひけり。とかくする程に、はや五十子伏姫の四十九日に向とす。よりに嫡男義成朝臣を施主として、瀧田なる菩提院に、大斂忌の法事あるべし、と聞えし比、義成は「この法筵に、大坊をも召加へよ」とて、使を富山へ遣されしに、大は山にをらすなりぬ。なほ彼此を索るに、樵夫等がいふやう、「件の法師は豫てより、準備をしたりけん、笈を背負ひ、錫杖を衝鳴らし、今朝

しも山を下るとき、吾們を見かへりて、灌田殿より入道を、尋ねさせ給ふ事あらは、このよし申せ、といひかけて、何処とはなく出てゆきぬ。かゝれば俟せ給ふ共、帰らじ」といふに、すべなくて、使者は灌田へ立かへり、緯の趣を申せしかは、義実嘆賞大かたならず。「渠既に誓ひつゝ、六十餘國を偏歴して、飛去たる八の珠を、舊の珠数に繋ぎ留すは、生涯安房へかへらじ」と豫ていひつることあれば、再会寔に描がたし。遺憾となり、「とひとりこち給ひつゝ、再て往方を索ね給はず。さはれこゝろに絶すやありけん、大坊が恙なく、帰り参ることあらば、渠がよすがになるべしとて、明年伏姫の一周忌の比まで、富山に一字の觀音堂を建立し、伏姫の徳義、八房が事さへ記して、姫の遺書もる共に、厨子のうちへぞ納め給ふ。今なほ富山に觀音堂あり。かくて夥の年を歴れども、大坊が首信なし。畢竟彼法師が久後いかん。そは後々の巻にて解なん。

作者云、「この書、筆輯第一巻より、今この巻に至ては、則一部小説の開場、八土出現の發端なり。是より次の巻々は、年月相次ずして、いと後の事に及べり。その間に物語なし。譬は彼水滸傳に、龍虎山にて洪信等が石碣をひらくの段より、林冲等が出現まで、その間数十年、物語なきがことし。又いふ、この巻の画像の中、金碗大輔孝徳が、川を洗す圖のときは、文外の画、画中の文也。この画像によらざれば、忽然として雲霧の晴るゝゆゑを知るよしなし。又使女の急訟に、柏田梭織を写し出すに、その在処を先にして、その来る所を後にせり。首尾錯乱に似たれ共、さにあらず。其人の小傳來歴、後に僅にその人の口中より説出すをば、事を先にして傳を後にす。画も亦是に従ふものなり。しかはあれど、画匠は只その画を画として、その意を意とし得ざることあり。こゝをもて作意と岩齧なきにあらず。この巻中もしかることあり、看官よろしく察すべし。